

死 別 (p.197-208)

ひとりの友人が死ぬ。すると私には、周囲の人々が彼の死について何を考えているのか解らなくなった。人々は集り、涙を流し、葬式の相談をしたり、冗談をいったり、かたくなに沈黙したりしていた。その男の母親はいった、「この子は結婚したときから、私にはもう無いようなものでございました.....」。彼の妻君の母親はいった、「稼ぐことをちっとも考えない人でして、家族のことを少しでも心にかけてくれましたらねえ.....」。親しかった友人の一人は、誰にともなく呟いていた、「ぼくは彼に対して怒っているのだ、自分の苦しみをひとりで背負って、われわれには決して知らせてくれなかった.....」。別の友人は、この際、葬儀委員長というものが必要であり、それにはあの男では役にたたず、この男ならば手際よくゆくだろう、ということを熱心に論じていた。私は、すじ書きを知らない芝居の舞台に、途中からまぎれこんだような気がした。気心の知れぬ人々のなかで、無益に自分の役割を探す.....しかしそのとき私の周囲にいたのは、ながい間の友だちや、友だちの知り人ばかりで、それ以上に気心の知れた仲間はないはずであった。

死んだ男-----私は彼をほんとうに識っていたのだろうか。「身体の調子が悪い」という話を聞いたときに、私は電話で彼の様子を確認しようと思った。しばらく会っていなかったし、彼の家を訪ねたことは年来絶えてなかった。その頃の私は、多くの雑誌に、多くの約束をしていて、絶えず仕事に追われながら、あたかも多忙が生きていることの証拠であるかのように暮らしていた。電話口で私は彼の具合を訊ねた。「いや、何でもない」と彼は気軽にいい、少し神経質な声でつけ加えた、「しかし誰からそんな話を聞いたの?」「誰から聞いても、そんなことは問題じゃないよ」と私はいった、「それより君の身体のことを話してくれたまえ。どういう風に具合がわるいのか」「なに胃が少し痛むだけだ、いつものように。こういうことは、まえから度々あってね.....」「明日君の家に行きたいと思うが、どうだろう」「それには及ばないさ、大丈夫だ」「会って話した方がいいよ」「ほんとうに何でもないのだ」「何でもないということを確認しておいてもいいじゃないか」「君が忙しいということは解っているし.....」「忙しくはないさ」と私はいった、「久しぶりで君に会って、ゆっくり話ができないほど、忙しくはない」。私は翌日の午後彼の家を訪ねるといい、その返事を待たずに電話を切った。

中央線の駅まえの広場は、しばらく時をおいて、私が行く度に変っていた。新しい店ができ、大きな建物の工事が進み、乗合自動車の停留所が右から左に移っていた。私は立ちどまり、うろ覚えの見当をつけ、行き交う人の肩が触れあうほどせまい商店街を通り抜けてどれもこれも似たような平屋のならんでいる住宅街の方へ歩いた。そのなかの一軒が彼の住居であった。玄関には妻君が出て来て、「いつもお世話になりました」といった。思えば私が彼の世話になったことはおそらく十度、私が彼の世話をしたことは一度もなかったと私は考えたが、だまっていた。彼はどてらを着て、顔色がいくらか青ざめてみえた。しかしその長い髪も、特有の微笑も常に変らなかった。病気の話はしたがらなかったが、私が固執すると、淡々と他人ごとのように喋った。話を聞いただけでも、事態の容易でないことはあきらかであった。「いくら申しても、医者に行かないのでございますよ」と私の方をみながら妻君はいった。「お茶をいれてきて下さい」と彼は妻君にいう。「ほんとに頑固で.....」といいながらも、妻君は別の部屋へ起って行った。「どうだ、一寸、診ようか」と私は努めてさりげない様子を粧いながら、きり出した。しかし彼は、言葉の調子に乗って来るような男ではなかった。顔色を変えず、しかしはっきりと、「それには及ばぬだろう」と彼はいった。「それより別の話をしよう。久しぶりではないか」。私はいい張った。病気の話を聞いた以上、診ておいた方がよいと思う、

診た上で今後どうしたらよいかを決めよう、話を聞いただけで見当をつけるのは中途半端である……。そういいながら、私はもしかすると彼の病が手おくれではないか、と考えていたが、診察したあとでは、その疑いがいよいよ濃くなった。「心配なことはないね。しかし……」と私はいった、「設備の十分な病院で検査し、診断を確実にする必要がある。ながくはかからぬから、入院した方がよい。外来検査では無理だ……」。私の頑固さにいくらか呆れたという風で、彼は入院を承諾した。しかしさしあたり仕事が山積していて、学校にも責任があるから、それを片づけた上で「来週の末になったら、万事君のいう通りにしよう」といった。「いや、できるだけ早い方がよいと思う」「ぼくも子どもじゃないよ」とそのとき彼は話をうち切るように鋭くいった。「病気のことは任せたまえ」と私も怒鳴った。「ぼくは医者だ」「しかしぼくの身体だから……」「君に仕事や責任のあることを考えずに、早い方がよいといっているわけではないぜ。その位のことは、考えた上で、早い方がよいと思うのだ。できれば明日だ」。彼はその翌日入院した。

病院の廊下で、見舞いの友だちが何人か出会ったときに、カトリック信者であった一人が、もし不治の病であるならば、そのことを当人に知らせた方がよくはないだろうか、といい出した。居合わせた誰もが反対したが、私にはそのことの当否についてはっきりした意見がなかった。もし友人の言葉を、証拠なしに、信ずることができないとしたら、友人とは一体何だろうか。私の言葉を疑わずに信じるだろう男のまえで、嘘をつくことは私にはむずかしい。たとえそれが彼を力づけ、救うためであったとしても、しかもそのとき、彼を救うみちは全く失われていた。診断に疑の余地はなかったし、診断が正しければ希望のあるはずはなかった。病室の彼はいった、「こんなに瘦せたよ」。その声は弱かったが、いつものように彼は自分のことよりも、周囲に気をつけていた、「今度はみんなに世話をかけた、忙しいのに。起きられるようになったら、働かねばならない……」。私には彼が「決して起きられるようにならぬだろう」ということはできなかった。

亡くなってからしばらくして、私はしばしば、彼がみずから死を望んでいたのではなかったか、と考えるようになった。それは自殺という意味ではない。私は病院の主治医と相談して、病人に病名をかくし、かくし了せたと思っていたし、彼には、あらためて仕事をはじめたいという望みが強いようだと思っていた。しかし彼がそういうことを口にしていたのは、彼の生きることを望んでいた私たちへの、一種の心遣いであったのかもしれない。私は、彼がすでに早く死病を感じていて、その手おくれになることをひそかに待っていたのではないかという疑をみずから否定することができない。たまたま病が襲って来たときに死の覚悟をしていたわけではないだろう。しかし半ばは死を恐れ、半ばは死を望んでいたのかもしれない。それより早く私は彼がこういうのを聞いたことがある。「ぼくのような人間でも、死にたいと思えば、死ぬ権利だけはあるだろう、他のことには権利がないとしても」。そういうときの彼の声は、沈んでいるというよりも、むしろ激しく投げやりにきこえた。「他のこと」とは、どういうことであったのか。私は敢えてそれを訊かなかった。話せることならば、訊くまでもなく彼の方から話していただろう。彼はそれ以上何もいわなかった。つき合うこと二十年、そのときに私は、彼の大きな部分は、私の理解の外にあると思った。

しかし二人の人間が解り合うとは、どういうことだろうか。「気分」は通じることがある。しかし「気分」は当人にも予測することのできない変転して極りのないものだ。つまるところ仕事と仕事のなかにあらわれたその人を除けば、一体何を理解したといえるのだろうか。

私たちは二十年、ある意味で、同じ道を歩んできた。絶えず自分自身以外のものであるとし、世界(と他人)を理解しようとし、それぞれ視野を拡大しながら、もの事の間に関連をもとめようとしてきた。そういう道を、私はその場の感想を書き散らしながら、彼は主として感想を自分自身の裡につつまきみながら、通ってきた。しかしそのちがいは大きなことではない。仕事は、真にその名に値するものを、彼もしなかったが、私もやりとげなかった。しかしその頃の私は、道がようやく曲り角にさしかかっているということを感じていないわけではなかった。多くのもの事の間に関連がみえはじめ、

そのことが自分自身の立場の自覚とつながり、何処にいても従って何をしていても、自分が自分自身であることに変わりがないと思うようになりはじめていた。仕事らしい仕事をするとなれば、これからだという気がしたし、それは私だけのことでなく、彼の場合にも同じことであるはずであった。そのとき病に倒れるほど、無残なことがあるだろうか。将来するかもしれない仕事は何であるかを私は知らなかったが、それが何であるにしても、彼の仕事の質を信じていたのだ。どういう仕事の準備もしていなかった男、あるいは何らかの仕事をなしとげた男が死ぬのではない。仕事の準備を漸く終った男がその仕事をはじめるまえに死ぬのである。

私の女友だちの一人は、彼がおかしい、大変奇妙な人間だ、といったことがある。彼女はそれ以上をいわなかったし、その後も彼女から彼の話を聞いたことはない。しかしどういうきっかけであったか、私が彼のまえで彼女の名を口にすることはある。それは日本橋の喫茶店の午後で、私たちの周りでは、男女の勤人がそれぞれ話しこんだり、笑いさざめいたりしていた。私は欧洲から帰ってきたばかりで、彼もまた帰国後まもなくの頃であったろう。話すことは多かった。その話は当然欧洲にも及び、彼が欧洲で彼女に会っていたことを思い出して、おそらく私は、彼女の消息を話題にしたのであろう。彼の反応は、私をおどろかせた。「その話はよそう.....」と彼は、それまで私の聞いたこともないほど激しく、ほとんど怒鳴りつけるようにいった。それ以後、私は彼女について彼と話したことがない.....しかし私の裡には、次第に空想が育っていった。その空想は、次のようなものであった。

彼は欧洲で彼女に会い、夢中になった(一度惚れこんだことがなければ、女の名まえを聞いただけで、男が俄かに激するということはないだろう)。しかし東京に残して来た家族を捨てるつもりはなかった(何故そのつもりがなかったかは、私にはわからない。しかしおそらく彼の強い「責任感」が、主な動機ではなかったろうか)。そこで窮余の一策を(窮した末でなければ、男が「大変奇妙」になることは、少いであろう)、彼は案じたにちがいない。彼自身は、東京の家族の面倒をみる。彼女はひとりで暮す。相愛の男女は、共に暮すことをみずからあきらめ、その苦しさには堪えることによって、かえって強く心を通わし、次第に精神的な絆を強めながら遂に無上の友情に到るであろう。その友情は、お互いの仕事をたすけ、お互いの人間を豊かにするにちがいない.....彼はそういうことを夢みて、その夢を実現することができなかったのであろう。

私の空想は見当ちがいであったかもしれない。しかし私は彼の死後、彼が一度は激しく愛したことがあり、その愛が彼を苦しめ、彼に夢をつむがせ、その夢と実際とのくいちがいとが彼を深く傷つけていたということを、ほとんど信じるようになった。彼はその短い生涯を、ぬるま湯のなかで過していたのではない。精いっぱい、彼なりのし方で、生きぬいていたにちがいない。

病院に彼を訪ねた後で、私は何かの用事のために本郷へ行ったことがある。死の観念は、私を圧倒していた。私は惨めな無力感に捉われ、周囲のもの事に興味を失い、ただ機械的に、人通りの少い本郷通りを歩いていた。そうして大学の正門のまえまで来たとき、突然「安保反対」の看板をかついで正門のなかから出て来る学生たちに出会った。学生たちは、ゆるく隊伍を組み、黙々として正門を出ると、三丁目の方へ歩いていった。そこから彼らがどこへ行くかを私は知っていた。その彼らの姿は奇妙にも、戦争の末期に銃を担ぎながら、正門を出て行った「学徒出陣」の光景を、思い出させた。故郷からも、恋人からも、家族からも、遠く離れた海や密林で死んでいった青年たち.....私は正門を出て来る学生たちを見つめながら、そうしてもその場を立去ることができなかった。彼らのなかの何人かは---誰が知ろう---岸政府の警察に殺されて、再びかえらないかもしれない。しかし私は彼らの隊伍に加わることもできず、彼らの犠牲を防ぐこともできない。何という無力、何という惨めさであろうか。私はただ小さな声で喋るにすぎない。それは癌に対して無力であるのと同じように、嘗ては学生を戦場に送り、今は学生をなぐりつける権力に対しても、全く無力でしかないだろう.....傍観者として育った私は、遂に傍観者として終るほかないのか、と私は、そのとき、暗澹たる心の底で感じていた。

彼は実によく働いた。国立大学で教えながら、講師として私立大学にも通い、雑誌・新聞に文芸評論を書きながら、難解な著作を翻訳するのに実に行きとどいていた。しかも広く、また正確に、内外の文芸の書を読んでいたのである。それだけのことをひとりでするには、昼夜を措かず、活動していなければならない。その必要はおそらく彼自身の側にもあったろうが、また他人の依頼を拒絶し難い性格にもとづくところも多かったのであろう。彼は大いに他人のために働いた。彼自身のために働く時が来ないうちに死んでももらいたくなかった。私はいつも、文章をつくり感想を述べるときに、彼が読んでそこから描きだせるものを描きだしてくれるだろうことを予想していた。誰が誤解しても、少くとも一人の読者は決して誤解しないだろうことを確信していた。たとえば、私が詩人ゴットフリート・ベンを紹介し、その知的劇のわれわれにとっての意味を説いたとき、その一年後には、彼の「二重生活(ドッペルレーベン)」の周到な訳があらわれた。その訳業がどれほどの準備と労力を必要としたか。そういう男のいなくなるということが、私にとってもどれほど多くを意味したか。

私はまた病室に彼を訪ねた後、見舞いに来合わせた旧友の一人と、旧知の夫人と共に、三人で自動車に乗ったことがある。「助かる可能性があるのかね?」「ないね」とそのとき私は応えた。「どの位もつだろうか。後のことも考えておかなければならない」と友人はいった。「わからないが、一カ月以上ではないだろう」。私はそういいながら、どうしても「後のこと」を話す気にはなれなかった。長い年月の間会わなかったその婦人は、少しも変ってはず、友人の話に、言葉少く応じていた。黙ってそれを聞きながら、私はその短いうけ答えのなかに、一人の男がわれわれの間から消え去ろうとしているということの、かけ換えのなさ、とり返しのつかなさに対するどうしようもない感慨があふれていると思った。彼女はもっと若かったときの彼を、すべての可能性が眼のまえにひらけていて、そのどれにも熱情を注ぐことができた頃の彼を、ある仲間のなかで、識っていたのである。彼女の眼は涙を浮かべてはいなかったが、追憶のために---と私は思った---美しく光っていた。

欧洲から帰った彼は、その心を妻君と子供たちに向けようとしてあらゆる努力をしたにちがいない。しかし愛情の向うところは、別にあったのであろう。相手が遠ざかれば遠ざかるほど、彼の心中の劇は、彼ひとりだけのものとなり、ただひとりの苦しみに意味を見出すことは、いよいよ困難になるばかりであったろう。「どういう犠牲を払っても、生きていることはよいことだと君は思うか、どんな状況のもとでも?」と彼は私にいったことがある、「いや、ぼくのことではない、一般的な問題としてだ」。しかしもちろん、それが一般的な問題ではなかろうということを、私は知っていた。しかし答えを見出すことはできなかった。

私は彼を理解してはいなかったし、おそらく今でも理解していないのかもしれない。私に理解することができたのは、ただ彼と私の間にあったつながりだけだろうと思う。そのことは彼の死後、私にとっていよいよ明らかになった。一個の石がそこにあるように、たしかに、一個のつながりがそこにあった。人生はそれ以外の何であり得るのか。彼の知らなかった国で、私は今この文章を書いている。私の小さな部屋は、明るく暖かく、静かで、机上には彼の書いた本が置いてある。窓の外には蕭条たる秋と、灰色の空がある。突然扉を叩いて彼が入って来ることはありえないし、彼にもう一度会うことは決してできない。そういう考えは、私に地団駄を踏ませる。私は話をしたいとは思わない。ただもう一度あの長い髪と青白い顔を見たい。それさえできないということ、彼に電話をかけることさえできないというほど馬鹿げたことが一体あり得るだろうか。しかしどんな馬鹿げたこともあり得るし、あり得るばかりでなく事実になった、とりかえしがつかず、測り難く、全く理解し難い事実。

彼の死後、しばらくして私は再び東京を離れた。その夏、「安保反対」に立ちあがった大衆はたしかに私を鼓舞した。しかし彼の死は、私の中で何ものかを変えていた。私はそのときまで、何処に暮し、どこで仕事をするかということに、強く拘っていたが、そ

のときから、そういうことは二次的な条件にすぎず、どこにいても、できることはできるだろうと、考えるようになった。新しい職が太平洋の彼岸にあり、私はその仕事を引きうけて、単身羽田から出発した。旅客機の窓から東京の街の灯が忽ち遠ざかり、やがて夜の海の深い闇のなかに消えて行くのを見つめながら、私にはどういう感傷も、心残りもなかった.....。